



中里恒子全集

中里恒子全集 第十二卷

定価二〇〇〇円

昭和五十五年五月十五日印刷  
昭和五十五年五月二十五日発行

著 者 中里恒子

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ八ノ七

電話(五六二)五九二一

振替東京二一三四

検印廃止

©一九八〇

目次

|         |     |
|---------|-----|
| 寫真の家    | 3   |
| 土筆野     | 37  |
| 屋根      | 73  |
| 静かな晩    | 103 |
| 相生い     | 129 |
| 花を持てる童女 | 149 |
| 浮絵      | 161 |
| 車井戸     | 183 |
| 鵲       | 207 |

|   |      |   |   |   |   |
|---|------|---|---|---|---|
| 解 | あとがき | 隴 | 山 | 初 | 松 |
| 題 |      | 草 |   | 音 | 襲 |
|   |      | 子 | 姫 |   |   |

|     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 392 | 391 | 335 | 291 | 269 | 227 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|

# 寫真の家



湿った空氣が絶え間なく吹きこんでいた。すっかり暮れているのに、硝子屋根の上はあかるい。かゝるは、先刻から、日光室の中をゆききしながら、もの案じ気な、しかし軽い気分で夜空を見ていた。あるとすれば、寂寥の果の快活さ、である。夜になると、羊齒の裏についた胞子が、昆虫のように光った。

その昔、かゝるは、積木の玩具で、いづみが家らしいものを造るのを見ていたことがある。

「ここは入口なの……ずうっと、はいれるの、ね、見て、」

「うん、」

かゝるは、本を読み続けながら、うわの空で聞いている。

「二階もあるの、」

「そう……」

乗せ方がわるくて、崩れかかるのを両手で支え、積みなおして、倒れない用心をしていた。

「二階には、だあれかさんがいるの、」

本の中では、病人が女に言った。「おい、アルフレット君に礼を言ってくれ、お前は看護婦を

仰せつけられたのだ、なんでも己<sup>おれ</sup>はきょうからはこうやって寝ていなくてはならないのだそうだ、まあ、これが己の死ぬる寢床なのだから、その積りでいて貰おうか、」

「ばかを言うのを真面目で聞いてはいけませんよ、ただ二、三日こうして寝ているが好いと、わたしと言ったのです、乱暴に起きないように、あなたは氣をつけて下されば好いのです、」

「ふん、君は知るまいが、僕についていてくれるこの女は、たいした天使だぜ、」フェリックスは皮肉な調子で女を褒めた。……

「ね、出来たあ、」

かをるは、本の中の病人の男、死病にとりつかれてゐる男が、愛する女を困らしているのを、無理もないような、哀れな気分で読んでいた。

「まあ、見てない、お家が出来たってば、」

積木の家を、むりやりかをるに見せたがっている娘の声に、顔を上げた。

「見てよ、」

「はい、出来たわね、こんどは何を作るの、」

「作らない、もう積木がないもの、」

「それをこわして、作ればいいでしょう、」

「だめだあこわすのは……」

かをるは、曲りくねった、あぶなっかしく積み上げられた二階と称する家を、娘に強迫されながら眺めた、その昔の日を、はっきरीと思ひ出してゐた。

「ままは、こっちへ一年でも二年でも住んで、よかったら一生いてもいいのですから、」

「いつ来るものが出来ますか、」

「決心が付きましたか、」

エヤメールが届くたびに、いと簡単に、そういう、決定したかのような、催促じみたことが書いてある。いづみは、積木の家を、むりやりに見せたがった頃と、全く、同じ状態なのだ。

冗談じゃあない。

あのときは、本を置けばよかった。今でも、そういうことが出来る、すればいい、なにも、くよくよすることはない、という風な、からからに乾いた明るさである。

むぎわら手の茶碗で御飯をたべ、絹の着物を脱いだり、たたんだりする、そういう暮しに未練があるのではない。かをるが氣を病んでいるのは、今更、娘のいづみとの一体感を求めていない、自分自身の内部のことなのだ。

トランクの二つや三つに、つめこんでしまえない、長い間の積み重ねた歲月の、離れられない埋み火のようなものを、何處へ埋めればいいのかである。

あかるくて自信があつて、自分たちはこれで幸福なのだ、と思ひこんでいる人間と、ただ、いっしょに暮したからと言って、そういうことが傳染するであろうか。娘や孫にとりかこまれて、スープを飲んでいるからと言って、そういうことが、他處眼にしあわせそうに見えるのであろうか。それは到底、飛びついてゆけることではないのだ。

恋にとりつかれて、われを忘れて、火のなかへ飛びこむよりも、それは危険に思えた。

何故であろう。かをるは、そこが外国であるからというようにことで躊躇しているのではない。

自分の暮しを、ひとに預けることが出来なくなっている、無私無我の境地には遠い、まだ生きようとする慾のある自分に気づいているからであった。

いづみは、母のかをるを、老いた人間の孤獨から救い出す心算でいる。まるで、水に溺れた子供を、抱えあげるように、泳ぎが出来て、力があれば、やさしいことだとも言うように。

かをるはしかし、いづみが、そう思っていることを、多少、誇らしくさえ感じている自分に、或る見苦しさを覚えていた。

「いったい、いづみさんは、もう日本へは帰らないつもりなの……あなたひとりを残して、平気なんでしょうか、」

かをるは、そんな問いに、うなずいた。

「帰らないでしょう、平気でなくても、しょうがないでしょう、向うには、向うの生活があるし、」

かをるは、いづみにむけられる非難めいた口調をも、苦にがしく思った。自分が、いづみに対してそういう思いがあるのは許せても、他人から、問われることはないような気がした。

もはや、すでに何十回か、かをるはこの種の疑問を向けられ、気の毒に、たった一人の娘と生別れて……と言いた気な眼眸を浴びていた。

「そうなんです、わるい子です……あたくしが、明日の御飯も食べられないほどでしたなら、それでも、まあ、ひきとってくれるかもしれませんがね、」

かをるは、その口調のなかに、いづみをかばうものが、本能的に働くのを意識した。

それを裏書くように、いづみが、

「よければ、一生、ままはこちらにいて下さい……」

そんなことを、平然と書いて来た事実を話して、哀れがってさえくれた反證としたいような、見苦しさを知ったのである。

そしてほんとに、ここへ置いておいても仕方がないから、道具や家具を、向うにやってしまってもいい、どの程度に、持って行けるものだろうか。かをるは、あれこれと、家の中を歩きまわって……この暮しの、十分の一のものをさえ、外国へ移すのは、容易ならぬ面倒であることを発見した。

それよりも、そういうことが気になるほど、無我夢中で、無一物で、娘のいづみの所へ飛んでゆきたいと思わない自分に、かをるは、茫然としていた。

いづみに會いたい。どうしても會いたい。そんな切迫した気持が、龍巻のように湧き起らないのが、ふだんの寂寥よりも、かをるを、慄然とさせた。

全く、どうしたことだ。

「あなたたちが、そう言うてくれるだけで、嬉しいと思っています、」

行くとも、行かぬとも、そうむげに断ることもないという、神妙な返事をしたためる心の底には、いつまた気が変って、トランク一つに身を托すことになるかもしれないという、母親のかけひきもあった。

かをるの身边では、殆どの家庭で、息子や娘が結婚してしまった。

四季折折の話にも、娘の所で貰った南京小桜が、今年もちゃんと咲いたの、お約束をしたが、孫の遠足なので今日は伺えなくなったのと、しゃあしゃあと言うのだ。

南京小桜は、管理さえよければ、娘のものでなくとも咲くのである。それでも、娘や孫にかこつけて言いたい気持は、子を持つ親たちの自己顕示であろうか。

強面で、ぱりぱりの仕事の鬼と言われる人物でさえも、娘を嫁にやってがっかりした、寂しいなどと、ぬけぬけと口走る。口走ることに、人間らしさがあるように世間がみとめる。ぶつんとも言わない親には、うしろめたさに似たものさえある。かをるは、どっちにしても、子は三界の首っかせの、いろはがるたの意味が、ようやく、かるた遊びをした頃から五十年近くあとになつて、諒解出来たことに気づいた。

それでもかをるは、

「おさびしくありませんか、あたしなら我慢出来ませんわ、気違いになつてしまふわ、」

そんな風に言われると、感情の動物然と惹き入れられて、寂しくなるのは不思議だ。

ある限りの手をつくして育てあげた骨肉なんぞという、歳月のやるせなさではなく、かをるには、人間の別れということが、無常に胸を締めつける。

これが人生さ……居直つてしまうことにも、まだ、かすかな疑いが立ちふさがる。

會わずば千秋の思いにとらわれるほどの、絶対の境地から、すでに脱け出していることに、かをるはほつとしているのであったから。

生活とは習慣なのであったから。

こういうまわりあわせ、それ以外のことではない。とらわれるほどのことではない。なんでもない。そう思う習慣を、かをるは持っていたのであったから。

ワシントンからずっと南へ下った、コロムビアに近い小さな町に、いづみの家族は、十年近く住んでいた。たまに近況を知らせる便りが、殆ど、変ったことのない日日であることのほかは、町の様子も、大きさもかをるにはわからない。小さいというのは、かをるの想像であって、涯しない海岸線のなかに、ぼつんとある町の、肥満した、世話好きな近處の婦人や、ひよろひよろの好人物の理髪店の主人や、たぶん、そうした人たちが穩かに住んで行ける程度の、小さな住宅地に違いないと思いこんでいるに過ぎない。

その町のどこかに、入江があるらしい。

休日には、その海の入江に、家族はピクニックに行くともえる。

小さな舟を持っていて、舟で海岸をひと廻りすれば、海老が馬穴に何杯もとれる。クラムもいくらでもとれる。飽きるほど食べて、あとは、全部冷凍するらしい。

ままがいっちゃってもいいように、半年分ぐらい、凍結してありますという、得得としたいづみの手紙を、かをるは、絵本でも読むように読んだ。

これだけの海老や、貝をグロサリイで購入したら、たいへんなこと、一家五人、乗馬馬が二頭、

秋田犬が一匹、猫が十匹、バンタムの鶏五羽、食物だけは充分であることをモットウにしているといういづみにとって、全く、ただで、半年分もの、海老や貝を収穫したことは、大事件であるらしい。

いかに、この一家が、食べることに全力をあげているかは、曾つて、かをもも実際に見ている。ずっと以前に、はじめていづみの良人のユージンと食事をしたとき、三人前はたっぷりある、ティボン・ステークを、ユージンがべろりと平らげて、最後に、アイスクリームをお代りしたのを、かをもは、ガルガンチュワのようだと、見惚れたのだ。

「料理のし甲斐があるわ、天下一品だと言って、食べてくれるわ、」

いづみが、汗だくで、飛び跳ねて、料理の本と首っ引で作業しているのを、驚嘆して眺めたことなども、凡て、かをもには、海老や貝を、馬穴に何杯か凍結することと関連して、極く自然な、一家団欒のピクニック風景に思える。

バンタムの鶏とは、どういう鶏であろうか。かをもは、二、三の知人にそれとなくたずねてみた。秋田犬がいるのはわかる。それは二年前に、いづみから、秋田犬を買って貰えないだろうか、手紙が来ていたからである。カタログで注文するだけでは、少し不安でもある、ままだがわかるから、それに、トウキヨウウチクケンというのは、誠実なケネルなのかどうかもと、書き添えてあった。

このケネルは、犬を売る仕組のなかで、客の注文に反するような方法で、その頃すでに問題を起し、會社が解散しかかっていたのだ。

アメリカの小さな町の、小さな家庭の中にまで、日本の犬屋の広告がゆきわたっていたことに、かゝるは驚愕した。そして、そういう方法で、犬を買おうとしているいづみにも、軽はずみのような、抜けているような、危う気なものが感じられた。

第一、仔犬の鑑別などは、長年犬を飼っているようにとも、かゝるに、責任のもてることではない。かゝるは、すでにそのケネルがつぶれていることを報告した。

秋田犬を欲しがっているのは、ユージンであることもわかった。それからまもなく、いづみの家では、他の方法で犬を手に入れている。そして、外国では、日本犬が流行し愛玩されていることを、かゝるの洋犬好きと並べてあった。

それにしても、バンタムとはなんだろうか。かゝるは、折柄、訪れた若い知人にもたずねた。「バンタムね、さあ、なんでしょう、種類のことでしょうか、」

「バンタム級なんて、言いますね、」

「あ、ボクシング、ライト級……そうすると、これは、闘う鶏でしょうか、」

ここに至って、かゝるも闘鶏ではなからうかと言う推測がついた。しかし、何故、闘鶏を飼うのだらうと、いづみに確めるほどもなく、バンタムの鶏は、かゝるから無関心に忘れられていった。

うちでは、幽霊を飼っています、そう言われても、かゝるは、それぞれの自由として、歯牙にもかけずにいるであろう。しかし、事によると、いっしょに暮すことにもなり兼ねない家庭の、馬穴いっぱい海老や、半年分も凍結した貝や、仔牛ほどもある秋田犬や、馬や……それは、あ

まりにも、かゝるの暮しと違いすぎる。

小さい町の小さな家と、かゝるが、いづみ一家を想定するのは、いづみを、まだ小さな娘としか思えない、かゝるの心の隅の執拗な保護者意識であって、事實は、違っているらしいことを、かゝるは、徐徐に自覚していた。そして、なにやら、不協和な、圧迫感さえあった。暮しの大小ではなく、たべもの、言葉、習慣……そういう外面的な対比ではないのだ。風土でもない。かゝるを拒ませているものは……それは、自分が強大なものに吸収されてしまうような弱い自我の恐怖に、曝されているからであった。

いづみ一家の一員になることによって、かゝるの懼れている、不定<sup>そでぎ</sup>の身のゆくすえに、一縷の虹がきらめいているとしても、まだ、虹だけあればいい安易さの中へ、やすやすと入って行けない自己の足場がある。吹きさらしの足場でも、ひと手に渡してしまったら、生きるそらはないのだ。

「そりゃあ、まだひとりで充分暮せるでしょう、けれども、弱々弱々になつてひとにすがりつくよりも、まだ何かが楽しいうちに、いっしょに面白く暮した方がいいじゃありませんか、」

いづみは、思ったことはぱっぱと、容赦ない言い方をする。よぼおれたかゝるの手を、遠く夢見ているのであろうか。

そしてそれに、いづみも脅えているのかもしれない。

「別に、賑かに暮したいとは思わない、このままの状態でもいい、すがりつくようなこともたぶらないでしょう、今更、身ぐるみ脱ぎすてて行かれるものではありません、」